

2017 年度第 8 回支部集会【東北支部】

2017 年 12 月 10 日(日)9:40-12:10(受付開始:9:20)
東北大学川内キャンパス講義棟 C 棟3F(C302,C306 教室)
主催:公益社団法人日本語教育学会
共催:東北大学 高度教養教育・学生支援機構

会場:〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 東北大学川内北キャンパス

交通アクセス: <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/>

参加費:500円(当日会場にて現金でお支払いください)

※ご参加予定の方は、なるべく[学会ウェブサイト](#)のマイページから12月8日までに事前予約をお願いいたします。当日の手続きが簡素化されます。「新規ユーザ登録」をしても本学会への「入会」となるわけではありません。

※ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

※支部集会終了後、**同会場で13時より日本語学習支援ネットワーク会議 2017 in 仙台と子どもの日本語教育研究会主催によるパネルディスカッション「外国につながる子どもと家族が地域で生きるということ」が開催されます。入場無料でどなたでも参加できます**ので、支部集会とあわせてぜひご参加ください。午後の催しの詳細は6ページ目をご覧ください。

※午後も参加される方は、昼食を買える場所が学内や近くにございませので、各自駅などでご購入ください。キャンパス内の食堂「川内の杜ダイニング」は営業しております(11:00-14:30のみ)。

◆支部集会日程◆

9:20	受付開始(3F)
9:40-9:45	開会挨拶(C302)
9:50-10:20	口頭発表①(C302)・口頭発表④(C306)
10:25-10:55	口頭発表②(C302)・口頭発表⑤(C306)
11:00-11:30	口頭発表③(C302)
11:35-12:10	今後の東北支部集会の在り方について(C302)

開会挨拶 【9:40-9:45】 <会場:C302>



口頭発表【9:50-11:30】〈会場:C302・C306〉

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム 3~5 ページ, 詳細は予稿集原稿をご覧ください。

〈会場:C302〉

- ① 日本語作文授業における母語によるピア・レスポンスのプロセスへの学習者の意識について
趙超超(東北大学大学院生)
- ② 外国人児童生徒の学びの自律性の変容
—ビデオ視聴によるパフォーマンスの自己評価—
三好大(東京学芸大学大学院生)
- ③ 口頭でのパラフレーズに関する教材開発の試み
—複数の言語技能の組み合わせを中心に—
鎌田美千子(宇都宮大学)

〈会場:C306〉

- ④ I-JAS と KY コーパスにおける量的な性質の比較
森秀明(東北大学大学院生)
- ⑤ 農家民泊における外国人参加者と農家間のコミュニケーションのための日本語支援の在り方
佐藤香織(北海道教育大学函館校)・田中真寿美(青森中央学院大学)

今後の東北支部集会の在り方について

【11:35-12:10】〈会場:C302〉

これまでの「研究集会」は、今年度から「支部集会・活動」として新しくスタートしました。何がどのように変わったのでしょうか。そして、今後の東北支部の活動を、東北のニーズに合った、参加者のみなさんがより満足できる活動にしていくためにはどのようにしたらいいのでしょうか。みなさんといっしょに共有し、考えたいと思います。

◆問合せ先(平日 9~18 時のみ)◆

公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会新館 2F

TEL:03-3262-4291 FAX:03-5216-7552 E-mail: shibu@nkg.or.jp



〔2017 年度第 8 回支部集会（東北大学，2017. 12. 10）発表・口頭発表①〕

日本語作文授業における母語によるピア・レスポンスのプロセスへの学習者の意識について

趙超超

本稿では JFL 環境の日本語作文授業における母語によるピア・レスポンス（以下 PR）の学習者の意識分析の結果を報告する。2015 年筆者は中国の大学でピア・レスポンスによる日本語作文授業を試みた。その後のインタビューにより、中国人日本語学習者の中国語と日本語でのピア・レスポンスに対する意識を調査した。「SCAT」という質的研究の分析手法により分析した結果、(1)中国語における PR の＜雰囲気盛り上がる＞＜気楽に勉強＞＜学習の習慣化＞という特性が日本語における PR の不満足点を補うことができることが分かった。そのほか、(2)中国語で PR は＜気づきを促す＞＜印象深い＞＜収穫がある＞＜成長思考＞という独自の満足理由を持っていることがわかり、母語による PR が有効であることが示唆された。今後は、ピア・レスポンスを経験した後の学習者の作文学習観の転換を検討する必要がある。

（東北大学大学院生）

〔2017 年度第 8 回支部集会（東北大学，2017. 12. 10）発表・口頭発表②〕

外国人児童生徒の学びの自律性の変容

—ビデオ視聴によるパフォーマンスの自己評価—

三好 大

外国人児童生徒にとって自律性は、日本語で学ぶ力の重要な要素の一つであるとされている。そこで、本研究では、自律性の変容に焦点を当て、どのような変容が見られたかを明らかにし、実践への示唆を得ることを目的として行った。高学年のフィリピンルーツの児童 1 名を対象にした学習した成果をポスターを用いて発表する活動を対象とし、ビデオ視聴によるパフォーマンスの自己評価活動での自律性の変容について、児童の学ぶ様子を観察し記述して OECD のキー・コンピテンシー(ライチェン・サルガニク:2006)の自律性の観点から分析を行った。活動において、当初は言語形式の誤りなどの課題にのみ言及していたが、自ら目標を設定しその達成に向けて取り組んだり、他者の視点を参考に自己評価をしたりする行動が見られた。この背景として、評価の視点の明確化と対話重視の活動設計が、思考の言語化を支え、自己評価の展開を促すことが示唆として得られた。

（東京学芸大学大学院生）

〔2017 年度第 8 回支部集会（東北大学，2017. 12. 10）発表・口頭発表③〕

口頭でのパラフレーズに関する教材開発の試み

—複数の言語技能の組み合わせを中心に—

鎌田美千子

読んだり聞いたりしたことを伝える際には、もとの表現を言い換えて自身のことばに取り込むことになるが、このようなパラフレーズは、上級レベルの学習者であっても難しいことが多い。だが一方で、パラフレーズに関する日本語教材は、現在のところ、ライティングのものに限られており、特に聞き手に合わせて抽象度を下げようようなものは扱われていない。そこで本研究では、授業やゼミでの発表、またピア・ラーニング等で話す際のパラフレーズに焦点を当てて教材開発を試みた。具体的には、上級レベルの留学生を主な対象に、a) 書いたことを話す、b) 読んだことを話す、c) 聞いたことを話す、といった場面でのパラフレーズを問題演習形式で示して、口頭でのパラフレーズを身につけることを目指した。本発表では、各パラフレーズの特徴と実例を示した上で、主に本教材の具体的な内容と進め方について述べる。

(宇都宮大学)

〔2017 年度第 8 回支部集会（東北大学，2017. 12. 10）発表・口頭発表④〕

I-JAS と KY コーパスにおける量的な性質の比較

森秀明

本研究では国立国語研究所によって開発中の I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language : 多言語母語の日本語学習者横断コーパス) の学習者発話データと、これまで日本語教育分野で多用されてきたタグ付き KY コーパスの全品詞を検索し、量的な性質を比較した。I-JAS 二次データの学習者発話総語数は 122 万語 (KY コーパスの約 7.2 倍)、平均 3,051 語、標準偏差 973 語であった。コーパスを使用した研究では複数のコーパスデータの比較が欠かせないが、高い精度が見込まれている I-JAS で先行研究の追試を行うことにより、研究が精密化できるという期待が高い。ただし設計方針の異なるコーパスの頻度をそのまま比較することはできないため、学習者のデータ量 (語数) やレベルを明らかにし、互いが比較可能になるように調整を行う必要がある。I-JAS では KY コーパスのように発話量がわずかしかない初級学習者は少なく、中級学習者の割合が非常に高いため、頻度比較を行う場合は注意が必要である。

(東北大学大学院生)

〔2017 年度第 8 回支部集会（東北大学，2017. 12. 10）発表・口頭発表⑤〕

農家民泊における外国人参加者と農家間のコミュニケーションのための日本語支援の在り方

佐藤香織・田中真寿美

本研究では、農家民泊での農家と外国人参加者との会話データ等から、双方向の異文化理解につながるコミュニケーションにするために有効な日本語支援について考察する。会話データを分析すると、「食事の準備の際の外国人からの手伝いの申し出やそれに対する農家の感謝・指示」や「参加者個人やその母国の事情・状況に関する質問と応答」などが特徴的であった。しかし、お互いの国の状況等への関心が表層的であり、単発的なやり取りに終わってしまう例や、外国人側が農家に遠慮して「個人的なことについて聞けなかった」という例もあった。さらに交流量を増やすためには、交流の起爆剤となるような刺激を与えることが重要である。具体的には、①外国人参加者が自国の文化・生活事情などを簡単な日本語で「新聞」風に事前にまとめ、団らんの時に農家に見せる、②農家・外国人参加者双方が「何をどこまで聞いてよいのか」を事前に考える機会を作る等が考えられる。

(佐藤—北海道教育大学函館校・田中—青森中央学院大学)

以上

パネルディスカッション

外国につながる子どもと家族が 地域で生きるということ

主催：日本語学習支援ネットワーク会議2017 in仙台
実行委員会・子どもの日本語教育研究会

日時 12月10日(日) 13:00～16:00

会場 東北大学川内キャンパス 講義棟C棟C200

外国につながる子どもと家族が地域で生活していく際にどのような支援が求められているのでしょうか。言語やアイデンティティ、子どもの母語継承の問題、保護者の地域社会における自己実現などについての事例報告を受け、来場者とともにディスカッションします。

司会：市瀬智紀(宮城教育大学)

パネリスト：

森野カロリナ(外国人の子ども・サポートの会)「二重言語で育つこと」

李王寧(仙台中国文化交流協会)「母語継承の意義」

裘哲一(宮城華僑華人女性联谊会)「地域社会での自己実現」

ディスカッサント：高畑幸(静岡県立大学)

共催：東北大学 高度教養教育・学生支援機構、宮城県国際化協会、
仙台観光国際協会、岩手大学グローバル教育センター、
宮城教育大学教員研究キャリア機構

後援：公益社団法人日本語教育学会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会

【事前のお申し込み・お問合せ】

*東北大学高度教養教育・学生支援機構のHPより事前にお申込みください。

https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1506319009

*お問合せ：東北大学・副島 健作

Tel. & Fax. 022-795-7967 Email kensaku@m.tohoku.ac.jp